

編集後記

本号は「有機農業」について世界の動向と日本での現状および将来に向けた期待と展望について、2021年11月に開催された（公財）農学会との共催シンポジウムでご講演いただいた演者の方々の論考をまとめたものである。「有機農業」は農薬や化学肥料を使わないで育てる農業と定義されている。これまでの病害虫や雑草との長い苦しい闘いを考えると、化学肥料や農薬を使わずに本当に農業生産ができるのか、またそれを拡大できるのかどうか疑問である。限られた面積の土地で可能であっても、それを広げた時の状況は変わってきそうな気がする。筆者はマンションのベランダで農薬を使わないで野菜を育てているが、今年はハウレンソウとレタスが害虫に食い荒らされて全滅した。環境を大事にしようとする、病虫害による被害は逆に増えそうな気がする。農薬や除草剤を使わないと環境に対する負荷は確実に軽減されるであろうが、食物としての「安全」は本当に担保されるだろうか。「有機農業」による農産物と従来の農産物に成分としてどれだけの差があるのだろうか。この点についてどこまで科学的データが蓄積されているのだろうか。

最近スーパーマーケットに行くと、有機野菜コーナーが設けられており、他の野菜と比べると少し高めの価格が設定されている。それでも売れているということは、安全安心を優先している消費者が増えているのだろう。最近いろいろな農畜産物で産地の偽装が問題になっているが、有機野菜でそのようなことはないであろうか。それをチェックする方法はあるのだろうか。そのような問題とは別に、筆者が昨年9月の農学アカデミー便りの理事所感で指摘したように、土壌に対して堆肥などの有機物を投入するだけで長期間の安定的な生物生産ができるのかどうか、土壌構造はどのように変化するのか、またリービッチ以来の無機栄養説は崩されないにしても有機物栄養の存否と、もしそれが存在するとしたらその重要性などについてはまだ不明な点が多く残されている。「有機農業」を実践する農家のためにも、また政策的な将来展望を支えるためにも地道な基礎研究が必要不可欠だと思われる。（長澤寛道）